



東日本大震災被災地における
第 3 回ボランティア活動報告
「絆・ベルリン」

報告の第一部

Dr. Frank Brose

絆・ベルリンの副会長

2012年10月10日から20日まで、「絆・ベルリン」は三回目のボランティア活動を実施しました。最後の旅行から、絆・グループ構成はすでに変化してました。参加者の数は25人に増加しました。15人の中核グループは10日間働いて、そのほかの10人は二、三日間中核グループに加わりました。

11人のメンバー（6人のドイツ人と5人の日本人）はドイツから、14人のメンバー（13人の日本人と1人のドイツ人）は日本の色々なところから旅をしてやって来ました。さらに4人の大船渡に住んでいる支援者が参加しました。

25歳の学生から76歳の年金生活者までいろいろでした。学期末休暇が終わっていたので、学生は少数しか参加することができませんでした。だから平均年齢は以前のより高かったです。参加者のうち4人は建築家でした。さらに参加者の2人は建築の学生でした。

中心となるグループは10月8日にベルリンからモスクワを経て東京に行き、市川に住んでいる日本人の絆メンバーの家に一晩泊まりました。そして、次の日に8人は2台の車で大船渡に行きました。ほかの7人は新幹線で一関に行き、そこから支援者が私たちを迎えに来て、車で大船渡まで送ってくれました。



最初の夜に福祉の里センターのロビーで集まった中核グループ

大船渡では三度目に福祉の里センターに女性は二つの部屋に、男性は三つの部屋に泊まりました。そこから大船渡や陸前高田、上長部、気仙沼、大槌などに車で行き、ボランティア活動をしました。日本人のメンバーと支援者の自家用車を使ったので、私たちはいたる所で公共の交通機関を必要とせずに活動しました。車を提供してくださった皆様に心から感謝いたします。

10月11日（木曜日）

絆・メンバーは3つの班に分けられました。作業内容は以下の通りでした。

1つ目の班は市立赤崎小学校へ寄付金を贈呈するために、午前中大船渡市赤崎町に行きました。去年、ベルリンのジョン・F・ケネディー小学校の子供たちが大震災によって被災した小学生にお金を集めました。そして、「絆・ベルリン」はJ・F・ケネディー小学校に、被害を受けた小学校を見つけ出すように頼まれました。



大船渡湾頭にある赤崎町は2011年3月11日に津波で破壊されました。海岸から400メートルしか離れていなかった2階建ての赤崎小学校も壊されました。



津波は授業が終わった時に起こったので、全校生徒と先生は校舎から脱出して、近くにある丘へ避難することができました。残念ながら、両親の家に残った何人かの同級生たちが家の中で亡くなりました。



校舎が津波で全壊したので、赤崎小学校の全校（103名の児童と16名の先生）はすぐ近くの坂の上にある蛸ノ浦小学校に通っています。

現在、29人の先生は狭苦しいところで161名の児童を教えています。一緒になった小学校は「赤蛸」と呼ばれています。

場所が不足しているので、第1学年から5学年の児童はそれぞれ1つの教室で授業を受けています。第6学年の児童だけ2つの学級に分けています。約半分の子供たちの家族は全家財を失いました。そして、たくさんの両親が失業しています。校舎の前にある校庭では急いで作られた仮設住宅があります。

まず、佐々木貞子校長先生と話し合いました。次に体育館に行って、ベルリンのジョン・F・ケネディー小学校からの義援金20万円を6年生のクラスの前で生徒代表にお渡しした。



そのあと続いて、絆・ベルリンで一番若いヤーナが挨拶をして、生徒たちの質問に答えましたが、残念ながら生徒側からはあまり元気さを感じられませんでした。次に私たちは子供たちと一緒に「じゃんけんぽん」をして遊びました。



佐々木貞子校長先生の話では、被災した子供たちは蛸ノ浦小学校の校舎で全校生徒と一緒に授業をしているが、間借り生活の余波と家族や家屋が被害に遭った生徒が多いので、全体として元気が出ないとのことでした。今でもたくさんの児童がいろいろなことをひどく心配しているそうです。

午後に、大船渡に住んでいる支援者の今野さんの紹介で、もう1つの大船渡市の小学校を訪問しました。小高い所にあるので、立根小学校は被害に全く遭いませんでした。また、体育館でも6年生のクラスと交流をしましたが、こちらでは質問もたくさん出され、活気が感じられました。レースとコンビで「じゃんけんぽん」をして遊びました。子供たちの行動にはっきりとした相違が現れたので、私たちは本当に驚きました。



現在（2012年12月）、破滅した赤崎小学校は取り壊されました。3年以内に、隣にある小高い所に新しい校舎を建てる予定です。

危ないですから、新しい学校を同じ場所で建てられることはできません。改正した大船渡市の地区整備プランに基づいて、今後は公共施設（学校や幼稚園、公民館など）は海の近くに建てられなくなりました。

全壊した赤崎小学校は子供たちや両親、先生方の記憶に残っています。また、被災地で見つけられた海水を浴びた写真も記憶を褪せさせません。

たとえば、大船渡の福祉の里センターの勤務員は下記の海水を浴びた写真を見つけて、本人の絆・メンバーを介し、私に手紙と一緒に送ってくれました。



寄付に対する恩返しに、赤崎小学校の子供たちは下記のポスターをつくりました。ドイツ語で「どうもありがとう - 私たちは元気です」、日本語で「103人元気に頑張ってます！」を書きました。



2冊の日本の新聞（岩手日報と東海新報）はベルリンからの寄付を報道しました。



義援金20万円で、学校は子供たちの希望を聞き「よさこい半纏（はんてん）」を買いました。半纏の上に「あかさき」と印刷されています。



よさこいを踊っている赤崎小学校の生徒

その日の午後、1つ目の班は大船渡市・猪川町長洞にある長洞仮設住宅を訪問しました。大船渡市では津波で何千もの住宅が全壊してしまったので、市内の37か所に、1801戸の仮設住宅が建てられました。最後の長洞仮設住宅は2011年の秋に総合公園予定地の中に建てられました。その団地には308戸の仮設住宅に約820人が住んでいます。一人暮らしの人の数は、75人ぐらいです。

今年の4月に、絆・ベルリンは長洞を初めて訪問しました。それ以来、交流を深めて、交友関係を結んでいます。初夏に日本人の絆・メンバーの廣瀬さんは、そこにひまわりを植えました。今回は自作の油絵をプレゼントしました。

当初は、ここに家賃なしで二年間住んでもらう予定でしたが、現状にそぐわず、市の行政は仮設住宅を最低3年か4年間維持していくと変更しました。今でも、いろいろな問題があります（たとえば、雨漏りがあることや、近所に食品店がないことなど）。しかし、大きな不満の声は上がっていません。本当に大きな問題は仮設住宅係りである大船渡市の支援員もNPO法人チャイルド・フアンドもやがて仕事をやめてしまうことです。

しかし、新しい公民館が完成して、人々はとても喜んでいました。翌日に公民館の落成式は予定されていました。



私たちはプレハブで建造した公民館の内部をあらかじめ見物することができました。建坪が150平方メートルです。2間の多機能室と設備の良い台所、トイレがあります。

* 2つ目の班は4名から構成されています。2人の建築家と2人の建築学の学生でした。ヨルク・グッチョウ氏の案内で上長部に行き、新しい公民館で建築敷地の様子を見学しました。その建物はヨルク・グッチョウ氏の設計で建てられました。

* 3つ目の班は大船渡に住んでいる支援者と初めて東北に来たメンバーから構成されています。彼らは破壊された大船渡市の復興状況を見ました。

初めて見た災害地は彼らの心に忘れがたい印象を残しました。まだいくつもの廃墟があるので、彼らは損害の大きさをよくわかることができましたが、同時に復興の進行に深い感銘を受けました。

その著しい進歩は次のページによく見られます。二枚の写真は1年間の間において同じ場所（小さな丘の上にある加茂神社）から撮られたものです。



船渡市、 2011年の秋（大地震の半年後）



船渡市、 2012年の秋（大地震の1年半後）

2011年の秋には、まだ、瓦礫の山と破壊された建物がたくさんありました。港の周りでは、半壊したコンクリート建築物の取り壊し工事が始まっていました。そして、下水道が詰まっていたので、水のたまった所がたくさんありました。それから1年後、大抵の瓦礫が取りのぞかれ、道路も送電線も再建されました。最初の建物も建てられました。本当に復興が進んでいます。写真の前景に「大船渡・屋台村」という仮設飲食店街が見られます。そこには店舗が20戸あり、店主も被災者です。

福祉の里センターのロビーに戻ると、毎日お風呂に入って、会食することができました。その後で、我々一同は、意見を交換し、次の日の日程表をたてるためにロビーなどに集合しました。団結心がたかまり、毎夕の集まりは皆さんにとってとても大切でした。

10月12日（金曜日）

今日は絆・グループは陸前高田市・上長部に行きました。そこでは2012年4月からドイツの援助で新しい公民館が建てられていました。

長部は高さ14メートル以上の津波できわめて大きい被害を受けました。漁港の近くにある水産加工工場が破壊されたので、800トンもの冷凍水産物が広範囲に散らばりました。12ヶ月間、延べ10,000人のボランティアはその腐った魚介で汚染された地区を清掃するという大変な作業を行いました。

津波は平坦な谷に沿って奥地に入り、上流のほうにある上長部も浸水しました。人口230人の村で、15人が亡くなりました。その上、30人の村民は全財産を失ったので、地域を去らなければなりませんでした。余った185人の村民の多くは今まで仮設住宅に住んでいます。

昨年九月、私たちは清掃作業の手伝いをするために、はじめて三陸海岸を訪れました。津波が日常の生活にもたらした影響についてもよく知ることができ、ベルリンから引き続き復興への支援ができるようにしたいという思いが生まれました。私たちはNPO 遠野まごころネットを通して、上長部の住民の人たちがその土地ではじまっている復興の出発点として公民館を建設したいという希望を聞きました。

ベルリンに帰って、私たちはこのプロジェクトをベルリン・独日協会に紹介しましたが、そちらでも同様にこの持続的なプロジェクトに理解してもらうことができて、必要な資金について多くの援助をいただきました。東日本大震災被災地の復興のために、ベルリン・独日協会は2011年3月からたくさんの寄付金が集まって、上長部の**プロジェクト**に全部で10万ユーロを提供しました。NPOのまごころネットは建築主です。絆ベルリンはこのプロジェクトをコーディネートしています。

また、私たちは建築家としてヨルク・グッチョウさんをメンバーに迎えて、設計を好意により引き受けてもらったばかりではなく、多くの資材の援助もいただきました。

寄付された資材を使って低エネルギー・ハウスの公民館が建ちました。新しい公民館はきわめてよい建築設備と断熱材を使って建設されました。ですから冷房にも暖房にもエネルギーはあまり使いません。冬の寒いときには蒔きストーブだけで充分暖かいでしょう。そして夏の暑いときには建物の中は涼しいですからクーラーは要らないです。

今年の四月には私たちは鍬入れの儀式を行うことができました。夏には棟上げ式が行われ、この十月に私たちが再び上長部を訪れたとき、建物は関係者のたゆまぬ作業によってほぼ出来上がっていました。



鍬入れの儀式、 2012年4月



棟上げ式、2012年7月

まず、公民館の建築敷地の近くにある記念碑の前で、亡くなった15名の人たちへ、1分間の黙祷を捧げました。その後でヨルク・グッチョウ氏の案内で建築敷地の様子を見学しました。彼は構造設計図に基づいて建築技術の問題を説明しました。



内装工事が進んでいたもので、工事は九割どおり進行したと思います。室内で保温材をつけながら、家の前に青塗の板張を乾かしています。
グッチョウさんの北ドイツのふるさとの気候は長部の気候に似ているので、彼は北ドイツで使用頻度が高い青い色を選び出しました。



割り注

その間に、上長部公民館は完成しました。鍬入れをしてからわずか九ヶ月間後に、完成を祝うことができました。



2012年12月9日に、落成式は現地でヘルツベルグ公使やベルリン独日協会の竹谷宗久副会長、東京日独協会の織田会長の御出席のもとで行われました。

ヘルツベルグ公使は駐日ドイツ大使館大使代理として参列されました。式典には地域住民ら約100人が出席しました。

まず、神主は祝詞をあげました。上長部公民館は「ベルリ・ハウス」と命名されました。



そして、いろいろな挨拶がありました。たとえば、公使、陸前高田市長、上長部区
長、遠野 まごころネット理事長、ヨルク・グッチョウ氏らがスピーチをしました。



菅野誠喜上長部区長



絆・メンバーの鶴岡さん

残念ながら、ベルリンに住んでいる絆・メンバーは式典に参加できませんでした。です
から、私は絆ベルリンを代表して祝辞を書きました。日本人の絆メンバーの鶴岡さんが
そのスピーチを代読してくれました。だんだん寒くなったので、最後のスピーチは公民
館の屋内でされて、野外にスピーカで流されました。



津波で被災された地元の木製材に生じ
たかんくずを再利用したくす球割り
や、鏡開きも行われました。

次に、「ベルリン・ハウス」の中で
住民は来賓客と一緒に温かみ溢れる
雰囲気の中、祝賀会を催しました。

上長部のお母様達は舞を舞いました。



日本人の絆・メンバーの石井清秀さんは素晴らしい作品を作って、上長部公民館に贈りました。初め、作品名は「輪の精」でしたが、公民館にかざられるので、作品名を「絆（輪の精）」に改称しました。



石井清秀： 絆（輪の精）

ステンレス製の彫刻、
13キロ、71x40x25cm

1943年に生まれた金属立体造形作家の石井清秀さんは市川市に住んでいます。今まで多くの作品を残しています。絆・ベルリンのメンバーで、去年の秋に私たちと一緒にボランティア活動をしました。

絆の果樹園

大災害の記憶で、東北の復興の象徴として、木を植えることを思い付きました。「たとえ、この世界が明日崩れ去ろうとも、私はリンゴの木を植える。」はドイツのことわざです。それで、できればりんごの木を植えると思っていました。2012年10月12日に、私たちはその計画を成し遂げることができました。上長部では、TMNのお陰でリンゴの木を植えました。

ちなみに、以前ドイツ人も日本より暖かい支援をいただきました。

1989年ベルリン壁が崩壊した時、日本全国約2万人以上の日本人が「桜キャンペーン」に募金し、1万本の桜の木を元壁のあった所へ植えてくれました。

日本人の親切に絆されたので、ベルリン市民も被災者を力付けたかったのです。



大災害の前に、たいていの上長部のお父様たちは魚業や船舶建造、林業を営んで、農業も兼業していました。果樹も栽培していました。被害地を復活させるために、上長部公民館の近くの敷地ではにリンゴの木を植えました。運よく、その森のはずれにある場所では土壌の塩濃度の問題がありませんでした。



そこに25本の苗木を4列に1メートル半の間隔置いて植えました。後になって、二本に一本の木が移植される予定です。



その木が高くなり、果実をつけるように、友情も深まることを望みます。そして「絆・ベルリン」によるその友好の絆がますます大きくなればいいと思います。

初めは敷地内に記念植樹をする予定でしたが、果樹園にしたらどうかとの提案が地元の方からあり、リンゴ園を作ることになりました。

資金は賛同者から寄付を募り、「絆・ベルリン」が負担するようにしています。後々にはリンゴだけでなく、葡萄や梨なども植えていきたいと考えています。

リンゴの苗木はとりあえず日本で調達しましたが、来年にはドイツのリンゴの枝を接ぎ木して日独友好リンゴを育てようと夢見ています。リンゴの種類は紅玉で、ドイツ名はヨナタンです。

しかし、現在、上長部のお父さんたちは、その外の問題を抱えています。最近の話題は鳥獣害です。畑のまわりには電気柵が張り巡らされていますが、鹿やカモシカたちによって柵が押し倒されてしまうこともおおく、日々の見回りと補修は欠かせません。獣たちの増加も原因のひとつではありますが、被災地特有の現象です。災害以後は人口が希薄になったので、動物が大胆になっていたと思います。絆・ベルリンは上長部の人に援助を申し出ました。電気柵の補修のために、今年の春200,000円を寄付します。



伝統的な民家
(被害を免れた上部の上長部)



公民館のそばに記念碑
(死者に対して)

植樹の後 上長部のお母様が私たちを美味しい食事に招待してくれました。上長部で取れた取り立ての野菜や果物で作ったごちそうを心行くまで味わいました。



食事に引き続いて、遠野まごころネットの臼澤さんが自分の体験について語りました。大津波の日、臼澤さんは彼の家と一緒に津波で流されましたが、いくつかの偶然に助けられて命を取りとめました。それ以来、大槌町の復興のために一生懸命に働いています。

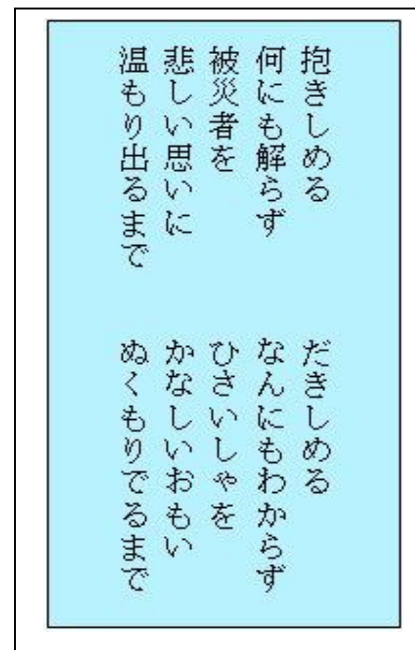


上長部のお父さんたちもそれぞれ自分自身の津波経験を語り始めました。彼らの描写は深い感銘を与え、我々も、上長部のお父さんたちも今にも泣き出しそうになりました。

日本人の絆・メンバーの村松庄次郎さんは話を聞いてから、詩興を得て、右の和歌を詠みました。

私はその詩をドイツ語に翻訳してみました。

Wenn ich auch nicht verstehen kann
Was im Inneren der Opfer vor sich geht -
Ich nehme sie in die Arme
Bis ihre traurigen Gedanken
Von der Wärme beruhigt werden.



最後に遠野まごころネットの齋藤さんは上長部の将来の計画を話してくれました。失業率が高いので、子供をもつ若い世代を中心に人口の流出が進んでいます。今後は、若い世代が戻ってこれるような仕事場作りが急務となっています。

近隣地域の人々を含めたかたちの産直や民宿の経営を目指します。その一環として、無農薬有機農業を指向する方針。まずは減農薬から始める予定です。

10月13日（土曜日）

午前、大船渡市社協復興ボランティアセンターに行きましたボランティアセンターは前と同じ場所にありますが、作業時間が7日間から3日間（金曜日～日曜日）に短縮されました。

大船渡では復興が進んでいるので、だんだん単純労働の量が減っていますから。

絆・メンバーは3つの班に分けられました。作業内容は以下の通りでした。

* 1つの班は大船渡市赤崎町に行き、泥で詰まった側溝の掃除でした。



2011年の9月と2012年の4月に、ほかの場所で同じ作業をしました。ボランティアセンターで今年の4月に私たちと一緒に作業した日本人のボランティアの人たちに、また会って、また一緒に活動できたのでいっそう楽しかったです。

しかし、側溝の半分が道路の表面の下にあったので、今度の仕事は事前の仕事より難しかったです。

仕事後、村松庄次郎さんは右の歌を詠んでいました。（私は自由訳しました。）

Beim geschäftig den Schutt wegräumen
Vergess ich mein Alter -
Und seufze doch bei jeder Schaufel zweimal.

賑やかに
瓦礫掃除で
歳忘れ
スコップ一
ためいき二
杯



泥を手押し車に積んで、近くにある置き場に運び、袋に詰めました。最後には、私たちはとても汚れてしまいましたが、長さ10メートルの側溝は、きれいに掃除されました。

* 2つ目の班は大船渡の港に行って、水中から引き揚げた魚網を整理してみましたが、残念ながら、失敗しました。



魚網の値段が高いので、やりがいがあると思います。一つの大きな魚網は3百万円以上 だそうです。



* 3つ目の班も大船渡の港に行って、津波で被害を被ったレストランで割れた窓と窓枠を取り外して、新しい窓枠を付けるを手伝いました。（3つ目の班は建築家のグループです）。

* 4つ目の班は大船渡市民の引っ越しを手伝いました。そして、気仙沼のほう

にいて、「ケセンタ市」でテントを張る手伝いをしました。
そこでは、仮設のお店の中に、地元の魚や野菜、手作りのお惣菜がたくさん並んで売られていました。
夕市が毎週土曜日に開かれています。
いつもながらの生活を回復するために、改善の第一歩だと思います。



10月14日（日曜日）

今日、我々は4台の車で大船渡から50キロ離れた大槌町へ行きました。

大槌町は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けました。臨港地区では津波の高さは12メートル以上でした。海岸から3キロ内陸まで津波は氾濫しました。津波後に、火災が広がりました。津波と火災で、全人口約1万5千人のうち死者・行方不明者は合わせて1353人でした（10人に1人です！）。3585戸の住宅は全壊または半壊しました。住宅の60パーセント以上なので、現在もたくさんの仮設住宅がありました。



私達は丘の頂上から大槌を見渡しました。大津波の20月間後でも、惨事の全容は見落とすことができません。

大槌町では遠野まごころネットによって運営されているボランティアセンターがあります。そのセンターは金曜日から日曜日まで開いています。

その週末にボランティアセンターの近くにある運動場グラウンド整備を実施しました。グラウンドに適した砂はとても高いので、私たちはたくさんの日本人のボランティアと一緒にグラウンドの土を掃除しました。野球のグラウンドには雑草が生い茂っていました。それで、雑草を根こそぎむしり取りました。その後で、グラウンド整備員は生徒と一緒にローラーで地面をならして、新しいグリーンサンドを加えて整地しました。



スポーツ施設の前に、まごころネットNPOは和食の軽食堂を経営しています。津波被災地域の経済復興に寄与するものです。



ここで昼休みをしました。昼食後、大部分のグループはまたグラウンドの掃除を続けました。同時に、5人の絆・メンバーはまごころネットNPOの臼澤さんと及川さん、芳賀さんと一緒に吉里吉里にいました。

巨大地震のとき、高さ16メートル以上の津波が吉里吉里を襲いました。湾東側での津波の高さは22メートルという想像できない高さでした。背の高い巨人の手で投げ飛ばされたかのように、5～6メートルの堤防は津波で砕かれました。

吉里吉里の人口は4200人です。この地区では750戸のうち300戸が全半壊の被害を受け、死亡・行方不明者は88人だそうです。吉里吉里の主な仕事は漁業です。津波で250隻の船のうち248隻が破壊されたので、失職した漁民がたくさん当地を去っています。水産業協同組合 もなくなりました。

吉里吉里への旅の理由は、そこに、ドイツのボッシュ財団の寄付で、もう一つの新しいコミュニティ・センターを建てる予定だからです。そのたてものは大きな建設計画の一部です。「一つ屋根の下」の名で、吉里吉里湾を見下ろす風光明媚な高台にある山の傾斜地に保育園、老人ホームなどと一緒に建てられます。ドイツのロベルト・ボッシュ財団が大槌町に建てるコミュニティ・センター（集会場兼木工工房）も、費用を全額負担してくれることになっています。200.000ユーロ（現在約2000万円）が可決されました。

「絆・ベルリン」はあの上長部と同じようにこのプロジェクトを仲介しています。施行主の「遠野まごころネット」とドイツの財団との間に立って、仲介の労を執ったのが「絆・ベルリン」であります。

初めは（第2回ボランティア活動報告参照）海の近くにある高台の上に建設する予定でした。しかし、安全のためという理由で、NPOがほかの地域を選べました。

今回はその新しい予定地を視察してきました。吉里吉里町に隣接する森にある場所は海から1キロぐらい離れています。標高30～40メートルなので、津波にも安心です。



まだ木がたくさん生えているので、土地を2013年の春に開墾されなければなりません。しかし、舗装道路がありません。NPOが地所を借り、建築許可も出たので、準備作業に取り掛かることができます。

廃案になった建設現場も見しました。そこにNPO「吉里吉里国」は新しい会合の場をたてました。



場所は吉里吉里半島に向かって、湾を見下ろす高台になっていました。そこから素晴らしい海への眺望もありますが、同時に惨事の全容も見られます。たくさんの木が流失・倒伏し、大地が押し流されました。

現在、斜面をビニールの幌で浸食しないように守っています。高さの14メートルの防潮堤を建てるのようですが、そうすると壁に囲まれた海の見えない町になってしまいます。



夕刻に大船渡に帰ってから、日独の交流を深めるために、立根地区の公民館で首都大学東京のグループと立根町の区民が一緒に集まりました。



いろいろな知り合いに再会できてうれしかったです。たとえば、野元弘幸氏（首都大学東京准教授）や今野龍雄氏（大船渡市立根地区公民館館長）と再会しました。そして、何人かの知人を得ることができました。他にもいろいろありますが特に、新任の大船渡の副市長も 婦人団と青少年団の会員も参列し、失業対策などについて報告しました。

挨拶の後、いろいろなスピーチがあり、ご馳走が出されました。焼きサンマやお寿司、フライなどを食べながら、歓談しました。

お互いに贈り物もしました。最後に私たちは一緒に歌を歌って楽しみました。

別紙第二部参照